II 「個性の教育を考える」(公開シンポジウム)

司会者　梶田　叡一（大阪大学）
話題提供者　吉田　章宏（東京大学）
　　伊藤　隆二（横浜市立大学）
　　畠瀬　　稔（京都女子大学）
指定討論者　吉崎　静夫（鳴門教育大学）

「個性の教育」とは何か？

吉田　章宏

「個性の教育」を考えるに当たっては，適切な問いを問うことが極めて大切である。「『個性の教育』とは何か？」と問わずに「個性の教育」を論ずることはできない。哲学から独立して以来，「・・・とは何か？」という問いは，心理学にとって最も不得手な問いとなった。しかし，この問いを敢えて問う。

「個性」は抽象的で曖昧な概念である。辞書的定義では役立たない。まず，抽象概念の「個性」と「この人の個性」における「個性」とを区別する必要がある。この事情の理解には，概念形成研究が助けになろう。フッサールの『現象学的心理学』に「色」概念の釈明がある。「このもの」，「このものの色」（赤，黄，青・・）と「色」の関係は，「この人」，「この人の個性」（・・・）と「個性」の関係と，構造的に同型である。先天盲者にとっての「色」概念は，想像するに，抽象的で曖昧，無内容であろう。色彩画家の「色」概念は具体的で微妙な多くの色彩で満たされていよう。前者と後者では，その「色」概念の内容は極めて異なる。「個性」概念にも同様の事情がある。ここで，他者の個性を豊かにとらえるには，自らの個性が豊かでなくてはならない，という困った事情が現れる。さらに，「彼の心理学」，「汝の心理学」，および，「我の心理学」の「三つの心理学」問題が加わる。現代の主流心理学は，「彼の心理学」であり，個性を個人差と同一視する傾向と限界をもつ。人間を豊かにとらえねば，「個性」概念も貧しくならざるを得ない。「個性」は「すべての人」にあるとする立場と「個性的な人」にのみあるとする立場の両者も視野に入れねばならぬ。文学は，個性を豊かにとらえている。「本人にとっての実存的に重要な問題」，「何を拒否するか」，「何を信じて行うか」がその個性を定める，とするその思想に学びたい。心理学者／教育者が豊かにならなければ個性の理解も貧しくなる。歴史的に規定された自らの立場を越えて，もろもろの他者の立場，更には，普遍的な立場をとることが出来る時，人は真に個性的となる。

では，「個性の教育」とは何か，その解釈は「個性」，「の」，「教育」それぞれの多義性により多義的となる。幾つかの例を挙げよう。第1に，個人差に対応する教育がある。初めに個人差があり，個人差を少なくするのを目指すのが「個性の教育」だと言う。第2に，個人差それぞれに応じた教育。たとえば，能力別，学力別，進度別の教育により，個人差に適切な目標の達成で安んじるの

がそれだと言う。第3に，多様な個性に発して，教育により，同一化，一様化である社会化に向かうのがそれだと言う。そして，第4に，同じく，多様な個性に発しても，さらに豊かで多様な個性化に向かう，多様化を目指す教育がそれだと言う。社会化と個人化の間，一様化と多様化の間を，教育は揺れ動いて来た。

では，「真の個性教育」とは何か。その理解そのものが，それを理解する者の個性の表現であろう。私は，個人としては，第4の立場を採りたい。その原理は，「多様性を通じての統一性」(Unity through Diversity)，「多視点性」(Multi-perspectivity)，そして，「事柄への忠実性」(Fidelity to Phenomena) である。そうした教育のためには，教師自らが豊かで個性的であることが求められる。教師とは「子どもと共に自らも豊かに育つことを仕事とする人」であるからだ。

「個性の教育」を研究する研究者にもまた，真に個性的であることを通しての深く豊かな人間理解が求められている。多様な素材から均質で上質の製品を生産する，品質管理の行き届いた高能率の工場のイメージではなくて，福岡正信氏の『自然農法』による，多様な草木が互いに助け合ってそれぞれが生かされて生きている農園のイメージ，これが私個人の「個性の教育」のイメージである。

教育心理学年報　第30集　抜刷

準備委員会企画公開シンポジウム

個性の教育を考える

梶田叡一　吉田章宏　伊藤隆二

畠瀬　稔　吉崎静夫